

出産後も勤務を継続するということの重要性

福留 美夏

東京女子医科大学女性医学研究者支援室

同 放射線科

略歴：2000年 東京女子医科大学卒業 同 放射線科入局
 2006年 同大学院内科系放射線学修了 医学博士取得、放射線科助教
 2007年 女性医学研究者支援室(フレックス制)勤務
 2008年 現職 (同 ワークシェア制)勤務
 現在、5歳・2歳の2児(女の子)の母です。

【自己紹介】

平成12年に放射線科に入局し、現在9年目になります。大学院2年目、大学院卒業、帰局後に、2児を出産しました。第2子出産後、大学勤務を諦めようと悩んでいた矢先に幸運にも昨年度、フレックス制に採択されました。大学院で放射線基礎医学を勉強し、臨床医として経験を重ねる重要な時期であったため、研究活動を主体とした勤務を継続することができたことは非常に有用でした。その後、至適な時期に放射線専門医やPET認定医を取得することもできました。出産時期の一時的な休職は、体力の低下、仕事に対する不安や焦り、職場環境の影響等をもたらしました。しかし、今回の制度における勤務継続により、自信や職場での仕事確立がなされつつあると実感しています。特に、主人の当直勤務との調整が困難であることも、大学勤務医を断念する要因の一つでしたから、当直勤務がないことは大きいことでした。そして、昨年度からの勤務の中で感じたことは、確実にこなせる仕事量が増えているということです。このことは、今後の勤務継続のきっかけにつながります。従って、出産による女性医師の離職を防ぐには、離職期間を短くすること、そのための制度確立を行うことが重要と思います。私にとっては、とにかく辞めないこと！と言われた上司の言葉に感謝し、この経験を少しでも社会へ貢献できるよう努力し、務めていきたいと思っています。

【この支援を受けて】

正直、出産後からの生活はめまぐるしく変化しています。産まれてホヤホヤの子が、いつの間にかハイハイして、歩いて、一人前の口調になって…いつの間にか、自分が眉間にシワを寄せて怒るようになって…。毎日、バランスよくご飯を食べさせることを考え、子供の鼻や咳が出始めると“まずい、明日はどうしよう”と主人と相談が始まり…。世のお母さん方って、すごい！えらい！と常々実感する毎日です。そんな生活ですから、決して仕事との両立に満足するということはありません。それでも辞めないことが重要でした。それを可能にしてくれたのは、今回の制度や家族の協力、子供の忍耐力、理解ある上司、職場環境でした。少しずつですが、子育てにも仕事にも余裕ができています。この経験を、貢献していけるよう、頑張っていきたいと思っています。

【後輩女性医師たちへのアドバイス】

時間は全ての人に平等であり、限られています。何事も無駄せず、良く考え効率良く行動すること。“時間はあるのではなく、自分で作るものである”…と、心がけています。